

江北の四季

令和2年

7月5日

第14号



半夏生



烏柄杓(カラスビシャク) 後ろに紙を置いて撮影

○第三十候、夏至、末候、半夏生(はんげしょうず)。半夏(烏柄杓) カラスビシャク) という薬草の生える頃。

「半夏」とは夏の半(なか)ばにカラスビシャクの花が開花するためにつけられたそうです。

「半夏生 ハンゲショウ」という植物もあります。名(な)の由来は、半夏生の頃に花が咲くからとか、葉の一部が白く変化する様子から「半化粧」と呼ばれたのが「半夏生」になったとか言われています。

一週間程前までは畑のあちこちでカラスビシャクを見ていたのですが、ガーデンナーが梅雨の合間の涼しいときにと、草むしりに精を出したので見かけなくなってしまいました。畑中を探してやっとミカンの木の根元に完全なものが残っていました。



烏柄杓

花茎が高く伸び先端に長さ50cm余りの筒状で上部が開いた苞(ほう)をつけます。

サトイモ科でミズバショウやザゼンソウと同じ仲間です。地上部を取っても塊茎(かいけい)が残っているの、同じところに何度も出てきます。名前の由来は見てのとおり、花の形(かたち)が(かん)が(か)柄杓に似ており、人が使うには小さすぎますが、カラスなら似合うということかと思えます。別名に「ヘソクリ」があります。塊

茎が漢方の生薬として使われるので、農家のお年寄りがこれを掘り取って売り、ヘソクリをつくったからだそうです。



姫檢扇水仙

○長雨に今まで元気だった花々は打ちたたかれ下を向き始めましたが、まだまだと思っていた花が雨に元気を得一気に咲き出しました



姫檢扇水仙



白花のアガパンサス

三週連続でアガパンサスの生花正風体を生けました。青花に続いて白花が咲き出したからです。青花にくらべ花茎も葉も細く、特に葉は弱くて垂れ気味のもものが多くそのまま使うとアガパンの凜とした品が出せません。そこで、青花の葉から細いものを選びだして使っています。また、より細い姿を求めて、葉は七枚にしました。アガパンサス(紫君子蘭 ムラサキクンシラン)はギリシャ語で「愛の花」を意味するそうです。そこから「恋の訪れ」「ラブレター」「知的な装い」などの花言葉が生まれているようです。さて、そのような花に比べられたのでしょ



アガパンサス



アガパンサスの株元

株もとで葉が向かい合って出ることを和合と言います。アガパンサスは皆さんご存じの通り、葉の和合の内に花茎が出ていますので、真副で一株、体で一株、いけることになります。



ギボウシ



ギボウシ(擬宝珠 銀宝珠 ホスタ)も花が咲き出しました。生花にいけるには花茎が長く葉が大きいものの方が見栄えがします。斑入りの小さい葉のものですがいけてみました。

「葉低く、花は高く」、「真副の間遠く、副体の間近く」、そして葉の和合の外に花茎をいける。池坊伝統のいけかたです。

ですが、念のため葉をかき分けて花茎の根元を探してみると、左の写真の通りです。?、?



何度見ても葉の和合の内から花茎が出て
います。うーん………
過日買った鉢を見てみても、やはり和合
の内から一本出てています。



思うに、ギボウシは前ページ中段の写真
のように、群生して葉が出ている中からい
くつかの花茎が伸び出てくるので、ギボウ
シは株としてみるよりこのように集団で見
るほうがふさわしいため、花形も見た目に
合わせて和合の外となったのでしょうか。
詳しいことをご存じの方は教えてくださ
い。

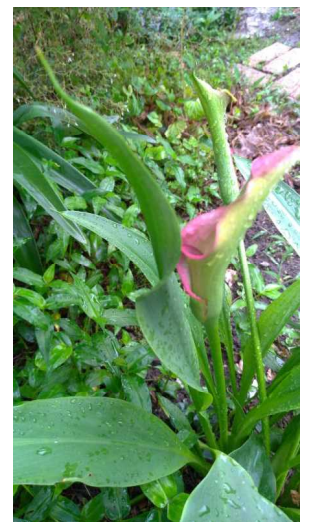
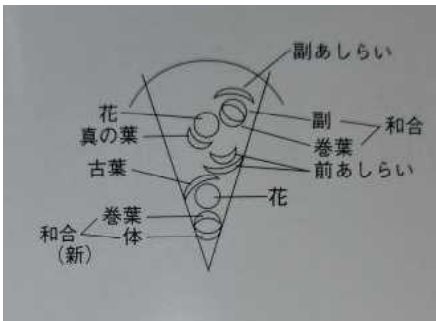


カラー(白花)

次にいけたのはカラー(海芋)です。真の
花が未だ白くなっておらずまた丈も短いも
のしか無く、花としてはもう一つです。雨
の中、大急ぎで花採りをしたので、一
週間早く取ってしまったようです。
カラーはいつも見ている花の様子から和
合の内と思いましたが、桐山先生
より「カラーには和合の内ものと和合の
外のものがある。」と教えていただきびつ
くりです。



和合の外



和合の内



図はどちらも『浮
雲』(柴田英雄)より

どうも白色カラーは和合の外で、それ以
外は和合の内ようです。株元をよく見て
採らないといけませんね。写真は畑で確認
をしたものです。



セイヨウニンジンボク(落葉低木)が咲き出しまし
た。残念ながら水上がりはよくありません。

